■シンポジウム：座長記

失語症への認知神経心理学的アプローチ

種 村 純* 辰 巳 格**

(高次脳機能研究 26 (2) : 128, 2006)

認知神経心理学は、深層失読、音韻失読、表層失読などの失読研究を中心に発展してきた。最近になり、音声言語の障害である失語研究が盛んになりつつある。復唱障害に関する深層失語、音韻失語、音韻的短期記憶障害や表層失語に関する研究や、動詞活用の障害に関する研究などである。本シンポジウム「失語症への認知神経心理学的アプローチ」は、その意味で先駆的な企画といえるだろう。司会は、当初、筑波大学大学院の宇野彰氏を予定していたが、体調を崩されたため、急遽、種村と辰巳があたることになった。

シンポジウムは、まず以下の3氏の話題提供から始まった。

辰巳 格氏は、「失語症における認知神経心理学—dyslexia 研究との接点」と題し、復唱障害と読みの障害を皮切りに、動詞活用の障害、さらには発達性失読、SLI などが、認知神経心理学の主要な2つの言語観により、どう説明できるかを論じた。

つづいて登場した松田 実氏は、「読み書き障害における認知神経心理学—その貢献と弊害—」と題する話題を提供した。松田氏は豊富な臨床経験から、日本人は文字言語を話している、などの独

自の興味深い見解を提示した。また、安易なモデル依存に対して警鐘を鳴らした。

最後に登場した小嶋知幸氏は、「復唱における認知神経心理学—入力経路を中心に」というタイトルで、復唱の機能モデルに基づき、いろいろなタイプの復唱障害が、どの機能レベルの障害で起こるのかを、ERP データなどを示しつつ、詳細に検討した。

次いで議論に移った。意識をどう扱うのか、内省が重要である、モデルは近似でありデータが大事、など、方法論に関する議論がなされた。

* 川崎医療福祉大学医療技術学部 感覚矯正学科 〒701-0193 岡山県倉敷市松島 288

** LD/Dyslexia センター 〒272-0033 千葉県市川市市川南 3-1-1-315